
真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士～

のんびり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士～

【Nコード】

N6830K

【作者名】

のんびり

【あらすじ】

鉄刀也———今、相棒とともに参上！！

ブログ（前書き）

初投稿です！！

よろしくお願いしますm——m

ブローグ

姓は
鉄クロガネ

名は
刀也トウヤ

ざんばらであるがサラサラの黒髪。

瞳はどこまでも深い黒。

目つきは目尻がつりがちで鋭い。

175の身長で、顔立ちは母親似でとても端正だ。

「万物、悉く切り刻め！ 式式地獄蝶々！！」

それは——神速。

それは——一撃で嵐を起こす。

「あんたに教えてやるさ！ 敗北の二文字をな！！」

鉄の剣士は武神と激突する。

己が武士道を貫くために。

「・・・は?! もう一度お願いします」

そして、予期せぬ幸運(?)が彼を待っていた。

第1話『転入生はサムライ?』（前書き）

すみません、また改正しました!!（涙）

第1話『転入生はサムライ?』

鉄一族。

古書に曰く、彼の者たちが戦場で振るう剣は、その名が示す鉄でできた鎧する容易に両断したという。

その力、まさしく一騎当千なり。

第1話『転入生はサムライ?』

その少年は凜とした佇まいである。

9割強の人間が『美形』と認めるであろう顔立ち。

目尻はやや鋭く、強き意思と高い知性を窺わさせる漆黒の瞳。

身長175cmを包むジーパンとラフなTシャツ。

着ている物は対して高くない代物だが、少年が着ているため非常に高価な物に見える。

その姿勢の良さ、顔立ちの良さ、凜とした雰囲気によるものだろう。

神奈川県川崎市に流れる多馬川に架かる橋——多馬大橋——の上から少年は見ていた。

「ノオオオ——ッ！——！」

「ぐあああああッ！——！」

多摩川の川岸で12名の人々が積まれていく様子を。

手足があらぬ方向に曲げられ、縦に積まれていく。

「……派手にやってるな」

服装から判断するに『不良』に属するものたちであろう。

「『武神』川神鉄心の孫娘……川神百代」

凄まじい『力』を感じる。

一族で『鬼児』、『鬼才』と呼ばれ少年——鉄刀也くろがねとつやと同等かそれ以上のものを。

「相手は不良。まあ、自業自得のところはあるが……やり過ぎだな」

縦に積まれた不良たちが、回し蹴りで一斉に吹き飛ばされた。

橋の方に飛んできた者を刀也は難無く掴み、ゆっくりと地に下ろした。

そして、刀也は思った。

彼も相手が外道なら容赦はしない。

だが――

「あんた以外には手を出していないんだ。少しぐらいサービスしてやってもいいんじゃないか？」

刀也は足元に落ちていた石を拾うと、迷いなく投げた。

百代の行動を非難するかのように。その石は弾丸よりも速く空を駆け、目標に向かった。

つまり――川神百代に。

「力ある者は己が力を自覚しろ。自覚なき力は自分を、周りを破壊するぞ」

刀也は橋を渡る。

相棒である木刀——式式地獄蝶々——が入っている竹刀袋を持って。

これから世話になる川神学園を目指して。

川神市。

関東の南にある政令指令都市で人口全国第9位。

市の北端には多馬川が流れ東京都との境となっており、東部には東京湾が広がっている。

江戸時代から栄えていた街で、武家も多く、馬も多かったことから川に多馬の名がついた。

古くからの閑静な住宅地が多いが、ここ数十年で川神の駅前付近は東京との近さから一気に近代化し、若者の街と言われようになった。

私立川神学園。川神市の代表的な学校で、個性を重んじるための自由な校則とユニークな行事・授業が特徴的である。

学力は上の下で、生徒数は多い。

中間試験は存在せず期末が勝負となる。

土日は休み。

アルバイトは可能。

他に、この学校の特徴として、『決闘』システムがあげられる。

だが、それは後に説明。

「おいおい……」

刀也は思わず呆れた。

校門はまるで武門。

そして、『川神学園』とどこぞの道場の如く板の看板が鎮座していた。

「ここは……学校なのか……？」

その疑問をさらに増加させるかのように、馬に乗った金髪の少女やメイド服が引つ張る人力車が門を通った。

「……来るとこ間違ったのか？」

刀也は数分間、門を通るかそのまま帰るかを本気で悩んだ。

そして、悩むに悩んで門を通過することにした。

刀也が悩んでいる間、川神市の姉妹都市であるリユーベックより来た転入生が強烈な登場をしていた。

「クリスティアーネ・フリードリヒ！！ ドイツ・リユーベックより推参！！ この寺子屋で今より世話になる！！！」

川神学園のグラウンドに表れた西洋の美少女。

少女は馬（浜千鳥）に乗り、風になびく金髪が美しい。

2年F組の生徒たちは窓際からクリスティアーネを見た。

反応はそれぞれだ。

「超・当たり前なんですけどおおお！！！！！」

島津岳人は魂の雄叫びを上げ、

「だっはっはっ馬かよ！ 面白えあいつ面白え」

風間翔一は爆笑。

「チャンス！」

川神一子は某式号機パイロットのようにニヤリと笑う。

「うわ……これは完全に負けたわ……」

優れた容姿を持ちそれに自信を持つ小笠原千花が、呆気なく認める程のクリスティーアーネの美貌に負けを認めた。

しかし、認められないこともある。

「でも……馬って……」

「日本では馬は交通の手段だろう」

クリス登場の少し前に、F組に現れた軍服を着た男——クリスティーアーネの父——は当然の如く言い切った。

「や、あの……道路とか見ましたよね？」

「自動車が多かった。だがTVでは馬も走っている」

「それ時代劇だと、思っんですけど」

「おお、あれはまさか……」

クリスティアーネの父は頑として、千花の言葉を受け入れる気はない。

そして、『勘違い』を助長させる存在が現れてしまった。

「? うわ!! よりによって例外が……」

「ここが今日から自分の学び舎か」

クリステイアーネは感慨深げに呟いた。

「自分の他に馬登校はいないのだろうか？」

「フハハ！ 転入生が朝から馬で登校とはやるな！！」朝からハイテンションの男と、

「おはようございますっ！」

クリステイアーネが輝いた瞳で、ハイテンションの男を乗せて来たメイド服少女（？）が引つ張る人力車を見た。

「それは……ジンリキシャ！！」

「うむ。そして我はヒーロー、九鬼英雄である！」

「自分はクリス！ 馬上にてご免！」

「我が名は九鬼英雄！ いずれ世界を統べる者だ！ この栄光の印、その目に焼き付けるが良い！！！」

英雄は己が背に印された九鬼家の家門をクリスティーアーネに見せ付けた。

普通ならば呆れるか、嫌がるか、畏怖を覚える。だが、クリスティーアーネは……

「おお、まるで遠山！」

すごい喜んでいた。

「人力車で登校の生徒もいるとは」

舞台はグラウンドから2年F組へ。

「さすがはサムライの国ですな。ハハハ」

F組の生徒はあんぐりとしていた。

「大和・・・この人達つてもしかして」

身長こそ低いがそれ以外は凄まじいスタイルを持つ、エロ電波係美少女の椎名京が『LOVE』の男子生徒に聞いた。

「ああ・・・・・・・・・・『日本を勘違いしている外国人』だ」

直江大和は確信を持って答えた。

なお、大和は風間翔一をリーダーとした通称『風間ファミリー』の軍師役として、仲間を助けたリロイロやっている。

知力よりも政治力で勝負する割とサド気質の少年である。

「父様はあちらにおられたか。では自分も……行くぞ浜千鳥
！！」

クリスティアーネが馬でグラントから教室に乗り込んで来ようとする。

しかし、それを察してF組の担任——小島梅子（鞭装備）が注意する。

「……馬からは降りて来い」

問題児クラスでも難無く担任をしている梅子であっても、今回はさすがに頭を抱えていた。

黒板に『クリスティアーネ』という名前が書かれる。

「クリスティアーネだ。改めてよろしく!!」

凜とした声と立ち振る舞いに男たちは見惚れていた。

「日本語にまったく違和感ないな。たいしたものだ」

梅子は素直に感心していた。

「リユーベックには日本人の友人が大勢いました。彼女たちと接している間に覚えたのです」

「うむ。円滑なコミュニケーションが望めるな」

梅子は一度話を切ると、クラスに言った。

「よし、何か質問あれば挙手していけ」

「はいはい!!!!!!」

早速、岳人が食いついた。

「では島津。品位を持つてな」

「オッスオッス！　くりすていあーね？」

「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」クリスティアーネ改め……クリスがそう頼むと、岳人は躊躇なく呼び方を改めた。

「クリス。彼氏はいたりすんのかな？」

ガタン！

クリス父は思いっきり壁を叩き、

「そんなものいないに決まっているだろうガッ!!!!!!」

父の怒号がクラスに響き渡る。

しゅん、となる教室。

「父様のおっしゃる通りだ」

「そ、そーすか……」

クリス父にビビる涙目の岳人。

「クリスにちよっかいを出す者は軍が殲滅する」

「GUN?」

F組委員長にして学園屈指のロリータキャラ——甘粕真与が疑問を抱く。

「父様は任務に私情を巻き込まない軍人だ」

「今めっさ持ち込んでたでしょうが!!」

性欲の猿こと——福本育郎がツツコミを入れた。

世界が変われば、『紳士』や『名探偵』とか呼ばれる重要キャラだが……この世界においては脇役の中の脇役。

ぶっちゃけるといなくてもいいキャラ。

非常に残念なキャラである。

——作者、俺の扱い酷くないか!?

まあ、それはさておき。

本編に戻ります。

——おおおおいつ……!!

「ふふふ」

「なんだか機嫌良さそうね？」

ご機嫌のクリスに、千花は尋ねた。

「大好きな日本にようやくこられたからな。友達から日本の良さをいっぱい聞いていた。日本のドラマも沢山見ている」
「・・・ちなみにそのドラマって何？」

千花は嫌な予感半分、好奇心半分で聞いた。

「大和丸夢日記や鬼兵などだな」

F組生徒たちがやっぱりか、という顔をした。

いずれも日本では有名な時代劇である。

どちらも勧善懲悪の部類だ。

まあ・・・鬼兵は物語の濃さも、かなりのものらしい。

「ここに来る前に、京都にも観光で一度寄ったのだ。ドラマ（時代

劇)そのものの場所で感動した!」

「映画村だ。それ絶対映画村だ」

岳人は思わずツツコミを入れた。

「ドイツの友達とやらが、面白がって偽知識を叩き込んだのが想像できるね」

温和そうな見た目に反して意外にキレやすいタイプ——師岡卓也が言う。

「しかし、普通信じるかねソレ」

大和が信じられないという感だ。

「純粹なんだろう目綺麗だし。俺クリスマス気に入ったよ」

翔一は純粹にそう思っていた。

「日本のどういうところが好きなの?」

千花の問いにクリスは即答した。

「武士道精神!!」

クリスはさらに付け加える。

「自分は騎士道精神を父様より教わったが……日本の武士道も実に壮絶で美しい」

曰く――

ボクシングで負けると切腹。

力士（RIKISHI）のき（KI）は全てを貫通する。
――などだ。

F組の面々はクリスとクリス父の誤った知識を修正しようとするが、クリスとクリス父は日本人を過大評価しすぎていてどんな言葉も良い方向へと受け取ってしまう。

ようは——馬の耳に念仏だ。

「父君。そろそろ……」

一向に話が進展しないことを見兼ねた梅子がクリス父に退出を促した。

「分かった。皆、娘をよろしく頼む」

「あの馬の回収は忘れずをお願いします。馬は登校に不要ですから」

クリス父が教室を退出する前に、梅子はシツカリと言い含める。

そして、クリス父はF組に面々に一礼し、出て行った。

ボタン。

ガラガラ。

……戻って来た。

「クリス、何かあれば赤い戦闘機でかけつけるからな。無論、通常の3倍だ」

謎の言葉を残し、親バカ軍人は今度こそ帰って行った。

第1話―2（前書き）

まとめました！！

第1話―2

この出会いは必然であつた。

強者は強者を呼び、強者は強者を求める。

同じ強者にして二人は異なる。

刀と拳。

護と破壊。

静と動。

男と女。

始まりは2年F組の川神一子が転入生であるクリスティーアーネーフ
リードリヒに、新入りの歓迎と称して川神学園独自システム『決闘』
を提案したことにある。

このシステムは生徒の自主性、競争意識を尊重するために作られた
ユニークなものである。

お互いの合意（互いのワッペンを地面で重ねる）があれば、白黒つ
けて戦う事を学校側が許可している。形式は、喧嘩でもスポーツで
も論戦でもなんでもいい。

決闘中の怪我は合法となる。

規則は大雑把に5つある。

？肉体を使用する決闘の場合、事前に決闘法を明記し教師に届け職
員会での承認が必要。

？決闘に立会人を望む場合は、教師がそれを担当し公平な立場でジ

ヤッジする。

？肉体を使用する決闘の場合、必ず教師2人以上の立ち合いが必要。

？決闘による結果で、遺恨を残さないこと。

？偽りの決闘、出来レースは提案したものを制裁の上に退学処分。

学園長立ち会いの場合は、この限りではない時もある。

「新人生歓迎なんてものは勢いが大事じゃからな」

とは、たまたま2年F組に学園長の川神鉄心が居合わせたために即座に決闘となった。

校内放送で決闘が行われるとの一報により、グラウンドに見物人たちが続々と集まってくる。

なお、本人たちの希望があれば見学不可にも出来る。

グラウンドには他の2年クラスや違う学年のものも好奇心で集まりお

祭騒ぎだ。

「朝飯用の弁当いかがつすかぁ!？」

「パンもありますよぉ!？」

こういうイベント事では、商魂たくましい部は臨時イベントにも対応は早い。

2年F組の通称(自称)『風間ファミリー』の翔一と大和、京はトトカルチヨをやっていた。

「誰にことわってここで商売してるのかなー？」

百代が大和の横に現れた。

「姉さん!」

「シャバ代納めてもらおうか。ふふふふふ」

「まあまあ姉さん。うちの転入生が上玉だよ」

大和の言葉に、百代は一子と正対したクリスに目を向けた。

「上玉きたあああつー!」

「ドイツから来たんだよ」

「あの金髪は綺麗なもんだよな。撫で撫でしたい」

凄まじいまでの美少女であるが、女好きの百代はニヤリ、と獲物を狙う目をしている。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う!」

「決闘の儀! 決闘の儀だ!」

「いいぞー! やれー!」

見物人たちはヒートアップしていく。

「2人とも、前へ出て名乗りをあげるが良い！」

「2年F組 川神一子！」

一子が堂々と名乗り上げると、千花や岳人が声援を送る。

「今日より2年F組！ クリスティアーネ！！フリードリヒ！」

クリスが名乗りを上げるなら、真与と翔一が声援を送った。

「ワシが立ち合いのもと、決闘を許可する。勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。……が」

鉄心は一旦言葉を切る。

「勝負がついたにも関わらず攻撃を行おうとしたらワシが介入させてもらう、良いな？」

「承知したわ！」

「承った」

一子、クリスはそれぞれ即答した。

「ん、スカートで闘うんだよなクリスちゃんは……」

岳人がふと気が付いた。

「ってことはおい！ ヨンパチイっ！！」

「分かってる！ バッチリ撮るぜええっ！！」

F組エロ代表の2人は違うところで盛り上がる。

「いざ尋常に、はじめいっ！！！！」

物理的圧力を伴う覇気が合図となり、二人は激突する。

「勝負っ！」

クリスが武器——レイピア（レイピア）を構えると、

「いっけええーっ！」

一子は先手必勝とばかりに、鋭く武器――薙刀^{レフリカ}を横薙に振るう。

「間合いに入らせないわっ」

薙刀とレイピア、どちらが間合いが長いかは一目瞭然。

一子は当然の如く、レイピアの間合いでは立ち回らない。

「……！」

クリスは一子の斬撃を躲すことに専念している。

「おー、はじまったな弟お」

大和の背後にいる百代が、肩に手を回してきた。

「っ……解説お願い」

いくら幼なじみで付き合いが長い百代と大和だが、その整った顔立ちが間近に来た大和はドキッとしてしまう。

百代は親しい者への距離感是非常に近い。

百代は大和にべったりと身体を密着させているが、これは珍しいことではない。

「んー。とりあえずワン子は攻めが単調すぎる」

ワン子（一子）の攻撃は鋭い。

並の者なら初撃で倒していただろう。

しかし、クリスは一子と同等かそれ以上の実力者。

誘いも、フェイントもない『単調攻撃』では、クリスは捉えられない。

「その腕……」

一子は、クリスの回避によりできた『隙』を狙う。

「もらったア——！！！」

踏み込み、小手を放つ。

「ふっ！」

クリスはギリギリで回避した。

「今の避けたのはやるわね。でも次はないわっ」

クリスは攻撃をようやく避けている。

どう見ても一子が有利。

「いい感じだよワン子、そのままそのまま！！！」

「行けーっ、押せ押せ押せ——っ！！！」

クリスは押されている。

「クリスちゃん、しっかり——！」

・・・そう思うのは素人。

実際は、一子の薙刀はクリスに見切られていた。

一子が薙刀を振り続けているため、クリスは攻撃できない。

だが、猛攻が終われば一気にクリスは攻める算段はある。

小技から大技に変わる時だ。

「どーしたどーしたっ！」

鋭く疾い小技の連続斬撃。

「っ！」

一子の攻撃に、後退するクリス。

「かかってきなさいっての！」

「……転入生の目が慣れてきたな。仕掛けてくるぞ」

百代が大和に説明すると同時に、踏み込むクリス。

大技が出ずとも、疾い小技に対応することを可能と判断してクリスは踏み込んだのだ。

クリスは薙刀と戦うのは初めてであり、レイピアには無い薙刀の攻撃範囲と軌道を短時間で慣れたのは優れた『武の才』が成せる技であらう。

「やーっ！！」

「！？ 疾いっ……」

紙一重でなんとか回避する一子。

あと僅かに踏み込んでいたら、間違いなく直撃していた。

一子は大きく薙刀を横薙にし、クリスとの間合いを空けた。

「おおつ、すつげえ！ 二人ともやるなあ！」

かなりの動体視力を持つ翔一は、一般人にはどんな攻撃をしたのかを判別できない速度のクリスの突きを見せていた。

「今……攻撃したんだよな！？ 突いたよな？」

辛うじて見えた岳人も、十分に高い動体視力を持つ。

それだけクリスの攻撃は疾い。

「……あの突きの疾さ尋常じゃない」

京は優れた弓士であり、この場では百代に次ぐ動体視力の持ち主である。

「ワン子……次間合い入られたら終わりだよ」

そして、戦力分析も同じく百代に次ぐ。

「続けて行くぞ。次で仕留める」

「上等よっ！」

一子は薙刀を頭上で水平に構えた。

「せいや——っ!!」

回転。

薙刀をクルクルと高速回転へと移行させる。

回転により攻撃点をわかりにくくなる。

「ワン子勝負かけてきたね」

「・・・これはっ・・・!?!」

一子が必勝の構えだとクリスは気が付いた。

気が巡り、意識を一点に集中させている。

（うかつに踏み込めばそこを斬られる）

クリスは高速で思考する。

（次の一撃を全力で避けて、その隙に攻撃を――）

（――なんて考えるんでしょうが、フフン）

一子はクリスの考えを読みきった、とほくそ笑んだ。

（ならここは・・・）

一子はクリスの何処を狙うかを定め、動く。

「おい違つぞワン子。そうじゃないだろう」

「？」

百代が何を言いたいのかわからない大和は、首を捻る。

言葉の意味を百代に尋ねようとしたが、それは無用である。

何故なら、それを知るのにそう時間はかからない。

「川神流——」

薙刀を大きく頭上に振り上げる一子。

そのまま頭部へ強烈な振り下ろしが行く。

構えからして、そう思うだろう。

しかし——

「山崩し——！」

薙刀の刃筋は、予想に反して斜めに流れていく。

斬！

クリスの『脚』へと振り下ろされた。

「！！！」

それはクリスにも予想外だった。

フェンシングの有効部位は銅だけであり、薙刀は脚すらも攻撃できる。

脚元への攻撃が不慣れな人間ならば、いかな武芸の才能を持つ者であつても一度も見えていない攻撃に不意をつかれるハズである。

良くて直撃。

悪くても体制を崩し、そこを付いてクリスを倒そうと一子は考えた。

この思考は、間違っていない。

「ふ！」

難無くクリスは回避。

「避け・・・!？」

一子が驚愕すると、体勢が崩れたところにクリスは踏み込む。

「セエイ!!!!!!」

突!!

レイピアが空を裂く。

「ぐあっ!!」

一子の左肩に強烈な一撃が炸裂した。

一子の誤算は、フェンシングには全身有効な種目——エペ——が専門だったということだ。

「~~~~っ!!」

悔しさと痛さで呻く一子。

「それまで！ 勝者クリス！！」

鉄心は勝者を声だかに呼んだ。

「ウォースゲー！ スゲー試合だった！！」

「何が起こったのかわかんがとにかくスゲー！！」

見守っていたギャラリーからドツと歓声が沸き上がる。

「ワン子が……負けた……ってわりと良くあることだったわね」

「そうですね。喧嘩ふっかけては負けてますよね」

千花の言葉に真与は同意した。

「足りない頭使い過ぎなんだよ。もつと本能で戦え」

百代の言う『本能』で戦うのが最善とは言わないが、少なくとも一子には『理』^{いちわり}で戦うよりも『本能』で戦うほうが良い結果に繋がるだろう。

クリスとの戦いもまた、結果が変わっていたかも知れない。

「ワン子よ。ちょいと見せてみい」

突かれた所を苦しそうにおさえる一子。

「フムフム・・・骨は大丈夫じゃな。しばらく痕は残るがの」

鉄心の簡易診察が終わると、クリスはホツとしたように言葉を発した。

「それは良かった。久しく手加減無しで突きを出してしまいましたから」

痛がっていた一子は急に笑い出した。

「・・・・・・・・ふ・・・・・・・・ふふふふ・・・・・・・・ふふふふふふ」

「どうした、『ふ』しか喋れなくなったのか？」

痛みでおかしくなったのかと思った大和は、割と本気で聞いた。

「アンタは黙ってなさい！」

一子は大和一喝すると、

「面白いわねクリス・・・・・・・・本気でやろーじゃない!!」

クリスに吠えた。

そして、一子は装備していたリストバンドを外す。

ズンッ！

思った以上に重い音は良く響いた。

「なっ！？　．．．あのリストバンド何キロあるんだ？」

「今まであんなハンデで闘っていたというのか！？」

観客はざわめいた。

軽く見積もって合わせて20キロはあるだろう。

「さあ！　第二ラウンドと行きましょー．．．」

「あほっ！　すでに勝負あったわ！」

鉄心は軽く一子の頭にゲンコツを見舞う。

「あ痛っ．．．じーちゃん何すんだよ．．．」

「初めから全力でいかんからそうなる」

「．．．さ、流石に大怪我は可哀相と思ったわけなの」

一子は話を反らそうとした。

「情けをかける必要が全くないとは……うぬんぬ!!」

「フェンシングも全身に攻撃が有効な種目がある。ワン子お前これ知らなかったじゃろ」

「一番メジャーな種目しか知らなかったわ。……てなわけで、負けには仕方のない理由があるの!」

鉄心の言葉をさらりと躲し、一子はクリスに人差し指を向けて言い放った。

「クリスッ! これで勝ったと思わない事ね!」

「む」

クリスはピクリと顔をしかめた。

「あいつこの期に及んでまだあんな事……叱るか?」

岳人が一子の振る舞いに見かねて動こうとしたが、卓也は止めた。

「ん、まあ大丈夫でしょ。見守ろうよ。悪いようにはならないと思うよ」

卓也の勘は確かに当たっていた。

同時に外れでもあるが。

第1話―3（前書き）

まとめました！！

その2！！

第1話―3

門をくぐり鉄心の気配があるグランドに向かう鉄刀也は、超高確率で当たる嫌な予感がしていた。

「グランドに人が集まっているな。それにこの気配は……。まさか、な……。」

刀也は『ある』ことを思い出していた。

刀也は父親の仕事の関係で2年間欧州にいた。

その国――ドイツ。

しかもリ्यूベック。

そして……。鉄刀也はクリスティアーネ・フリードリヒと面識があり、同じ学校に通っていた。

刀也の祖父『鉄幻十郎』と鉄心は友であり、刀也と鉄心は面識がある（百代や一子とは面識は無い）。

鉄心は箱入り娘のクリスと『男』である刀也と面識があるとは少しも考えていなかった。よって、同じ学校に通っていたことは後にしても問題無いと判断した。

だが、刀也には問題大有りだった。

そもそも刀也は自ら両親に付いていくことを望み、ドイツへと来た。

その目的は14歳の少年にしては特殊だ。

武家の中の武家——『鉄』に生まれた母であるが、武術の才能は皆無であり運動神経も並であった。

しかし、知能は非常に高く東京大学考古学科を次席で卒業する程である。

東大在学中に父と出会い、卒業と同時に結婚した。父は一般家庭出であるが、鉄家は名家にしては有り得ない程に家柄を重視しない。

よって、当主にはなれない（武術の才能が無いため）という条件付きであるが……当主にして父である元十郎とその妻は、優しく人柄も良い刀也の父を直ぐに気に入り二人の結婚は問題無く終わった。

結婚して一年後、刀也は生まれた。

刀也は鉄の血と云うべきか、幼き頃より武術の圧倒的な才能を開花させ・・・『100年に一人の天才』、『剣の申し子』と呼ばれた。

成長につれて才能が衰え・・・することは無く現在では『鬼才』『剣神』と呼ばれていた。

その強さ故に『四天王』——川神百代、橘天衣、九鬼揚羽、鉄乙女——に数えられても何の不思議も無いのだが、

「称号に興味は無いです」

と、対外試合や決闘を今まで出来るだけ避けて来たために、刀也の名は従姉妹の鉄乙女に隠れている。

だとしてもその強さは本物であり、考古学研究者である両親の護衛をよくしていた。

天然の父、のんびりの母。

日本より遥かに治安の悪い国が、考古学研究者が好む場所であることが多い。

治安が悪い国で二人は正に鴨が葱を背負った状態であり、何度も強盗目的の者たちに襲われた。

しかし、刀也の前で銃やナイフで武装していたとしても無意味であった。

一人として例外はなかった。

外国の地元ギャング団に目をつけられたこともあったが、木刀一本で百人近いギャング団を一时间とせずに全滅させたこともある。
(ドイツ・リユーベックに着いて・・・ちょうど2週間したあの日・・・)

刀也は思い出たくない過去が勝手に回想されていた。

リユーベックについた刀也は両親に仕事で4日間ほど家に帰らないと言われ、良い機会だからと思い街を探索することにした。

知らない場所を開拓しよう、そう思ったのが悪夢の始まりだった。

土地勘も無く、ましてや日本でも無い異国で迷ってしまったのだ。

海外に行く前にドイツ語の勉強をしていたが、何せ急に決まった海外行き。

半月も無い時間でドイツ語を習得できる訳もなく、街の看板も半分程度しか意味を理解出来ず、現地人と会話できる能力も無い。

結果として、刀也は『ある家』の私有地に迷い込んでいた。

ウロウロ。

刀也は歩き続け、ようやく人に会えた。

その瞬間――

「はっ!？」

発砲された!!

刀也に見たら弾丸が発射された後でも、回避は難しくない。

弾丸を回避し、両手を上げて降伏行動を示した。

だけど、また発砲された!

「ジェスチャーは万国共通じゃないのか!？」

刀也は仕方なく、発砲して来た男に一瞬で接近して意識を刈り取った。

問題解決……かと思いきや、今度は三人が出てきた。

武装はアサルトライフル。

「おいおい？」

ダダダッ！！

「ちょっ——」

刀也が言葉を発する隙もない。

こちらにまた人が向か来る。

「三人・・・五人・・・十人・・・ちつ、何人増える！？」

刀也はまだ見えぬが、気配を読み増え続ける人数を正確に把握する。

「87人?! しかも一人やばい気配がいるな」

マスタークラスの人間であることに間違いない。

言葉を聞く気はないらしい。

闘うか、逃げるか。

ならば――

「三十六計逃げるに如かずだ!!」

全速力で逃げ出した。

その後、逃げて逃げて逃げ続けて・・・追い詰められて仕方なく戦い、計3251人をノックダウンした。

逃走劇は三日間にも及びマスタークラスの隊長『赤髪の双剣使い』や『若返ってきた初老軍人』とも激戦を繰り広げた。

激戦の末に日本語が通じる者がいたおかげで誤解はとけた（スパイと勘違いされた）。

命を狙われたものの、元はといえば刀也が敷地内に入ってしまったのが始まりであり、双方ともこの事を不問とした。

そして、お詫びにと食事に誘われて断ったのだが・・・押し切られて行った。

軍に入らないか、とか。

孫の婿にならないか、とか。

刀也は、それらをもちろん丁寧に断った。

刀也は帰宅途中……もう彼らには二度と会うことは無いだろう、と考えていた。

否、強く願った。

神を信じない刀也は初めて願った。

（神様、頼むぞ）

だが……この世界に神は居なかった！

リユーベックのとある学園に転入した日。

美しい金髪をなびかせた美少女——クリス——に偶然出会った。

少女に引き付けられた。

主に……嫌な予感により。

それは正しくあり、一騒動を呼び込みその際にクリスと知り合いとなった。

そして、クリスのリユーベックの学園で唯一の男友達が刀也であった。

（あの三日間といい、初日の騒動といい……リユーベックは大変だった。……だけど、楽しくもあったな）

刀也はフツと微笑すると、川神学園のグラウンドで人垣となっているところへ向かう。

（やはり、クリス……何故彼女が日本にいる？）

おまけにレプリカサーベルでレプリカ薙刀を持った少女と闘っている。

（まあ、そのことは鉄心さんに聞けばいいだろう。それよりも、この後はどうすれば——）

刀也が今後の行動を考えていた。

刹那、殺気が飛んできた。

「ッ!？」

しかし、刀也はその場から動かなかった。

（牽制!）

刀也の僅か数ミリ横を《気弾》が空を裂き、大地を穿った。

刀が動いていれば、《気弾》は直撃していた。

「やるな。そうでないとなまらないからな」

「川神……百代！」

守護と破壊。

二人の強者の出会いは……大勢の者たちが見守る中で行われた。

刀也と百代が出会う、少し前――

「ま、それはおいといて。やるわね……アタシ達はアンタを歓迎するわ」

戦いを通して一子はクリスを認めた。

そして、Fクラスがクリスと一子を囲みクリスを歓迎した。

クラスの者たちも、クリスの堂々とした真っ直ぐな戦いを見て認めたのだ。

「じゃあさっそくアンタのあだ名を考えるわね！」

「あだ名？ 『クリス』で十分だが？」

一子の提案にクリスは怪訝そうな顔をした。

「ダチには必要でしょ。えーとね、うーんとね」

一子は少々——じゃないかもしれないが——回転が悪い頭脳をフル稼働させて考える。

「……クリスだから……『クリ』!!」

「く、クリ!？」

「や、やべえ! 立った!」

『クリ』から想像される意味は一子とクリス、即座に反応した育朗とではかなりの違いがある。

彼女たちは植物の栗。

育朗は・・・まあ思春期の男子が想像するモノである。

彼女たちは「犬!」「栗!」等と至って幼稚な言い争いを始め、睨み合っていた。

「成長してなかったな。クリスも張り合っているし・・・」

「・・・そうだね。二人は精神レベルが近いから争いになるじゃない?」

岳人と卓也は若干生暖かい視線を向けていた。

それは彼らだけでは無く、周りの空気も実に微妙な感じになっていた。

そんな中、彼女は動いた。

「世界の可愛い娘は全て私へのお供え物」

百代は意味不明な事を言い、素早くクリスの腕を掴んだ。

「来い。お姫様抱っこしてやろう」

「っ！？ な、何をする！！」

一瞬で間合いを詰められ、あまつさえ腕まで取られたクリスは反射的に拳を繰り出した。

反射的故に・・・クリスの本来の力と疾さで放たれた拳は大の男の大人でさえ、一撃で昏倒させるものである。

それを女子に放ってしまったのだ。

クリスは「しまった」と心の中で後悔したが、それは杞憂に終わった。

「おお〜、疾いな。お前さんは強いんだなあ〜」

百代は軽々と手の平で受け止めたのだ。

「な!？」

クリスは軽々と止められたことが信じられなかった。

「だが残念ながらまだまだ私にはかなわん。ほ〜ら」

クリスは軽々と抱き上げられてしまった。

「この強さ・・・貴女が川神百代ですか？」

「ピアチエーレ! そこのわん子の姉でもある」

「モモ先輩、それイタリア語・・・」

京はすかさずツツコミを入れた。

「おお・・・噂は聞いておりました」

クリスは僅かに嬉しそうに言う。

「私の知る『最強のサムライ』から・・・真剣勝負を繰り返す戦士である、と」

「ほう？ 詳しく知りたいな」

百代は『最強』という言葉に反応した。

戦闘狂の血が騒ぐ。

「特に『最強のサムライ』の話をじっくり——」

鉄心は、百代の頭を後ろから叩いた。

「アホかモモ。ほらほら早う授業に戻れ戻れ」

鉄心は百代から危険な気を感じ取った。

だからこそ、百代の気を逸らそうとした。

だが――

「いる！ ふふふふ、いるぞ！ 強いヤツが！！」

無駄だった。

百代は黒い笑みを浮かべた。

獲物を狙う目。

戦いを望む目。

「待たんか！ モモ！！！」

鉄心は百代を掴もうとするが、クリスを降ろした百代には届かなかった。

鉄刀也を見つけることは川神百代には至極簡単だった。

今朝、一瞬だけ感じた強大な力。

数ヶ月前に戦った九鬼揚羽よりも確実に強い。

力の殺し方も巧みであり、一般人だったら・・・否、並の強者でも彼を強者だと気が付かないだろう。

だが――

（私は普通じゃないんだよなあ）

川神百代は強者の中の強者であり、ただの強者では無い。

今朝は距離がありまいち場所を特定できなかった。

だけど、今は違う。隠している強さを看破すると言うより、自然と共鳴すると言った方がいいだろうか。

間違いない。

鉄心と同等或はそれ以上の者を、いくら人混みの中に居ようが50メートルも離れていないこの距離で見失うことなど有り得ない。

——自分が一番求めているモノだから。

百代は駆け出す。

一気に刀也との間合いを狭め、挨拶をとばかりに《気弾》を放つ。

当てるつもりは無い。

刀也はそれを軌道から読み取り、敢えてその場を動かなかった。

「……何のつもりだ？」

百代の神速の動きに観客達のほとんどが付いて行けず、《気弾》が地面を抉った轟音が響いた後に百代がその場を動いたことに気が付いた。

そして、百代が攻撃した声の主——刀也——を観客たちは初めて認識した。

観客達は驚いた。

刀也の服装が制服で無く私服と言うことだけで目立つのに、顔立ちがかなり整っており、例えば制服を着ていても目立つのだ。

しかも、如何なる時であろうともその存在感を無視出来る者はいないだろう。

それを今の今まで誰一人と、その存在を認識できなかったのだ。

「若い男と女がやると言ったら決まっている。——デートしないか？」

観客達——女子生徒——は悲鳴に近い叫び声を上げた。

百代にはファンクラブが存在し、主には女子生徒である。

憧れのお姉様が大衆の面前で、男子にデートを申し込めば悲鳴の一つもあげたくなるだろう。

「遠慮する」

刀也は即答した。

百代は確かに美少女であり、普通に言われれば僅かに心動かされたかも知れない。

「その殺気を消してからにしてくれ」

刀也は止めてくれ、とばかりにため息をついた。

「いいじゃないか。遠慮するな！」

百代の拳が振るわれる。

一撃必殺。

様々な武道家たちが、百代にかなりの頻度で挑戦して来る。

何れも全く百代には敵わず、刹那の時に勝負は着いていた。

だからこそ、観客たちは刀也が一撃で吹き飛ばされる映像を想像した。

しかし――

「止める」

轟！

大気を震わす一撃を右手で持った竹刀袋で弾いた。

「無意味な戦いは止める」

――鉄流剣術 閑いん

その勢いのままに、遠心力を生かした一撃を百代に見舞う。

『風』の名の如く・・・竹刀袋は強く、疾く、鋭く百代に襲い掛かる。

激突！

百代のガードの上から、彼女を吹き飛ばした。

「「「「！？」」」」

観客達は驚いた。

百代の攻撃を防ぐだけでは済まず、一撃を与えたのだ。

「ふう・・・」

刀は深い深いため息をつく、百代が吹き飛ばされた事にさほど驚いていない鉄心に話しかけた。

「お久しぶりです、鉄心さん」

「大きくなったのう……3年ぶりじゃな。剣の腕前も格段に上がっており」

「ありがとうございます」

「あと……家の孫が迷惑をかけてしもつたのう、すまぬな」

「いえ……こちらにも非があります。気にされることはありません」

今朝の一件もあり、刀也も何かをいうつもりはない。

「わかった。制服を渡すからわしについて来てくれんか？」

「分かりました。と、言いたいところですが――」

ユラリ、と悪鬼の如く立ち上がる百代から凄まじい《気》が噴出している。

「彼女が言葉だけでは止まってくれそうにありません」

刀也は竹刀袋から相棒——式式地獄蝶々——を解き放つ。

刀也は朱色の木刀を構え、言った。

「生徒たちを校舎に避難させて下さい。後、出来たら結界の展開もお願いします。彼女は僕が抑えます」

「……すまんのう」

鉄心は頭痛が仕出した頭を片手で押さえた。

第2話『臆病な剣神』（前書き）

うーん・・・失敗したかも？

とりあえず2話は一部構成で終わらせました？

第2話『臆病な剣神』

生徒たちが校舎に避難する中、川神院拳法師範代にして川神学園体育教師であるルー・リーと鉄心は結界の維持に努めていた。

「学園長……彼は何者です力？」

百代と刀也の攻撃一つ一つが疾風を巻き起こし、激突すればそれだけでグラウンドに嵐を巻き起こす。

そんな激しい戦闘を繰り広げられていた。

今のところ攻めつづけているのは百代。

刀也は防戦に徹している。

素人が見たら百代に刀也が押されっぱなしに見えるが、ルーが見るところでは全くの互角だ。

要は戦闘スタイルの違いで百代は『先の先』、刀也は『後の先』で

あるからだ。

解りやすく言えば……百代は先手型、刀也は迎撃型ということである。

それを証明するかのように、百代の甘い攻撃には刀也が鋭いカウンターを合わせてくる。

そして、もう3分間も戦闘は続いていた。

戦っているのが百代であることを鑑みれば、これまで長く戦える者をルーの知る限りは僅か数人しかない。

しかも、何れも百代よりも長く生きた歴戦の武人ばかりだ。

百代と同年代の者でこれ程までに戦える者をルーは始めて知った。

「彼は鉄刀也……『武神』鉄幻十郎の孫じゃよ」

「鉄……なるほど」

武術を極めんとする者で、『川神』と並び称される武家『鉄』の名を知らぬ者ははつきり言ってもグリである。

ルーも例外無く『鉄』の名は知っている。

「では……彼が——」

「そうじゃ。鉄家最強の男——『臆病な剣神』じゃ」

長く後世まで語られる『川神学園武神対決』は烈しさを更に増す。

「川神流——無双円月斬ッ!!」

刀が僅かに体勢を崩した隙を見逃さず、百代は気を纏った回転二段蹴りを放つ。

刀は持ち前の反射神経で蹴りを数ミリ単位で躲す。

だが・・・それがまずかった。

「ふっ」

百代はニヤリッ、と笑う。

先程のわざとらしい大振りの技の真価は直接打撃に有らず。

両脚に纏った《気》を空中で打ち合わせ、無軌道に《気弾》を拡散。

いかに優れた反射神経を持つ刀也と言えど、音速を越え神速の弾丸を数ミリ単位の距離で全て躲すのは不可能・・・だと百代は判断した。

もちろん、無軌道ということは百代自身にも降り懸かり、彼女も負傷した。

しかし――

「なっ!?!」

百代の反射神経でも霞んで見える程の超神速を持って刀也は《気弾》を躲す、躲す、躲す、躲す!

1、10、100!

全弾回避!!

回避した刹那に放った、迎撃の一閃は百代に直撃する。

「ぐあっ……!!!!」

百代は勢いよく吹き飛び、校舎にめり込む。

ドンッッッ!――!!!!

砲弾が撃ち込まれたが如く、校舎が揺れる。

少しは効いただろう。

そう期待したが、結果は期待ハズレに終わる。

「おいおい……反則じゃないですか？」

刀也は呆れたように、平然と立ち上がる百代に問う。

百代は全身血だらけで、立てなくなってもおかしくないダメージを受けたはずだが、直ぐに立ち上がり傷口は瞬時に塞がっていた。

瞬間回復。

それが《気》による作用だと、刀也は一目で見破る。

真似は……出来そうに無い。

《気》の総量・扱いの上手さは百代に分があるのだ。

「反則なもんか、お前のスピードだって同じようなもんじゃないか？ 私が完全に捉えられないなんて・・・初めてだぞ!!」

「いやあ、まさか刀也くんと百代が戦う日が来るとはの」

「・・・ワタシは剣の道を志してはいませんが・・・
これはまさに剣の境地『人刃一体』!!」

ルーは思う。

これ程までに剣（刀）を華麗に、疾く、強く扱える者はいないだろう、と断言できた。

刀也が剣なのか、剣が刀也なのか・・・解らぬ程の一体感を感じる。

「すごいものを見ています、ワタシは」

「武家の次代を担うに相応しい若者たちじゃよ」

鉄心が目を細め、温かい視線を彼らに送る。

「・・・しかし、百代は楽しそうダ」

「うむ」

「遊んでいる少女のようダ」

「・・・これはこれで良かった」

ルーは川神百代に対して、あまりいい感情を持ち合わせていなかった。

それは百代が強すぎて、それを持て余し、人間の幅を広げられない

哀れな者だと思っているからだ。

「百代を導けなかったのは……ワタシの力不足だったということかネ……」

ルーの呟きは、普通の少女のように楽しそうに戦う百代に対する懺悔のように響いた。

「好敵手の存在というのは、いいのう」

鉄心の脳裏には若き日が甦る。

互いの死力を尽くして戦い、技を高めあった日々を。

「やはり」

鉄心のしみじみと呟く。

鉄心の見える先で戦う二人は、若き日の川神鉄心と鉄幻十郎だった。

グランドで行われている大戦闘を全ての学年、全てのクラスの者が見ていた。

「わああ・・・綺麗、花火みたい」

「あれが川神百代と鉄刀也の本気・・・デタラメですね」

二人の戦いを眺めつつ、いかにも賢そうな少年は考える。

「ああいつのと戦う場合は、いかに倒すかではなく・・・」少年の視線が厳しくなる。

「いかに戦わせないかを考えた方がいいですね」

「だって、レーザーうつてるよ、百代！」

「最近の女性は強いですね、本当に・・・それに比べ男性は弱くなりま——」

「あつ？ レーザー斬ったよ！ あの人！！」

「・・・・・・・・・・なっていないのかもしれない」

再び刀也VS百代。

「鉄流・九龍激牙！！」

九ヶ所同時に穿つ神速の突き。

（疾い！ だが・・・・・・・・軽い！ ならっ！！！）

百代は拳を放つ。

「はああああっ!!」 右拳の衝撃波で剣速を緩める。

そして、左手で速度の落ちた式式地獄蝶々を止めた。

「捉えたぞ!!」

百代は拳を溜めて技を放つ。

「終わりだ! 川神流・星砕き!!」

轟!!!!

超神速を誇る刀也と言えども、式式地獄蝶々を押さえられた状態では直撃は免れない。

かといって、式式地獄蝶々を手放し相手に奪われれば刀也に勝ち目はないことは、彼自身がよく解っていた。

だからこそ、刀也は直撃を選んだ。

その結果は・・・百代と同じく校舎にめり込むことになった。

「があっつ!!!!」

巨大な鉄球を撃ち込まれたようなトンでもない痛み。

一瞬、意識が飛びかった。

たが不幸か否か、直後に背中を中心とした激痛が全身に走ったことにより、それは回避された。

素早く校舎から抜け出すと、百代の追撃に備えた。

「ヤバイ!!」

刀也は式式地獄蝶々を構えた。

しかし、それは無駄だった。

百代はその場から動いていない。

「……お前は不死身か？」

百代は不思議そうに聞いた。

『星砕き』は百代の技の中でも、奥義に次いで破壊力のある技である。

四天王の一人、九鬼揚羽を倒した技である。

それを直撃して直ぐに立ち上がったことに、流石の百代も思わず動きを止める程に驚いてしまったのだ。

「馬鹿をいうな！ 全身が痛い！！ あんたみたいに瞬間回復なんて俺はできないんだぞ！！！」

刀也は割と本気で怒っていた。

「あんたの目は節穴か！？ 頭からも血が出てるだろうがっ！！！」

外部ではうつすらと流れている程度である。

しかし、内部に受けたダメージはかなり大きい。

百代の拳を受けた肋骨には、確実にひびが入っているだろう。

「まあ……あんた程じゃないが打たれ強さには自信はある」

刀也は右脚を半身出し、腰を僅かに落とす。

式式地獄蝶々を左手で持ち、柄の先端を左腰部に持っていく、右手を柄に軽く添えた。

その構え——『抜刀術』と一般に呼ばれる型である。しかし、それは鞘走りを利用した一撃必殺の型であるために、木刀では真価を発揮できない。

「決着を着けよう。これが最後の一撃だ。そして——」

刀也は笑みを浮かべる。

「ありがとう。こんなに楽しい戦いは初めてだ——」

刀也の《気》が爆発的に式式地獄蝶々に集中する。

それに呼応して式式地獄蝶々は、刀身の朱色を濃する。

「ああ！ 私もだ！！」

百代も笑みを浮かべる。

《気》を右手に集中させ、光が暴力的に発する。

（戦いを通して学ぶこともある、か）

刀也は尊敬している祖父の言葉を思い出す。

戦いは奪うだけ、傷付けるだけだと思っていた。

戦いを通して学ぶことなど無い、と信じていた。

それは刀也が強すぎがために、優しすぎたためにそう信じていたのだ。

彼が戦えば必勝。

しかも、圧倒的な勝利。

身体には傷一つつけることなく、相手には多大なダメージを、怪我を負わせた。

幼い頃は自らの強さを喜んだ。

だが、歳をとるにつれて己が強大な力に恐怖し、何度も武術の世界から身を引こうとしたが……無理であった。

何だかんだ言っても武術は好きで生き甲斐であり、自分自身の人生そのものとなっていたからだ。

だからこそ……あの日以来、『護る』という目的以外で武術を使うことはなかった。

だけど、今日は違った。

最初は百代の振る舞いが我慢出来ずに戦いを挑んだ、と思ったが・

・それは違う。

自分自身が戦いたかっただけだ。

己に流れる武家の血が、武人の血が、剣士の誇りが、自分と同等かそれ以上の存在——百代——との戦いを望んだのだ。

（ふっ……俺はあんたにどうこう言える人間じゃなかったようだ）

自分自身に嫌気がさすが、同時に吹っ切れた。

戦いは『護る』時だけではなく、学ぶため、成長するためにも必要である。

自分自身を縛る必要はない。

——俺は戦う——！

——成長するために！

——
護るために！

—— 強くなるために！

——己の意志で！！！！

過剰な『護る』という束縛から放たれた刀也は、急速に進化を開始する。

「鉄流奥義！！」

「川神流奥義！！」

二人の鬨気が極限まで高まる。

「神激獄炎刃！！」

「神激光炎破！！」

二人が交差する。

「「おおおおっ！！！」」

《氣》と《氣》。

木刀と拳が激突した。

爆！！！！！！！！

まるで大型爆弾が爆発したかのような圧倒的な轟音と衝撃波、砂煙が発生。

「「「「きあああッ！？」「」「」

校舎のほとんどの窓が割れ、ひびが走る。

校舎からは窓際にいた生徒たちの悲鳴が響くが、奇跡的に怪我人は出なかった。

数秒後、砂煙が晴れた。

そこには、百代が立ち、刀也が片膝をついた風景があった。

「百代先輩の勝ちだ!!」

一人の生徒の声が呼び水となり、緊張感に支配されていた生徒たちが一斉に騒ぎ出す。

「きああッ！ 百代先輩素敵です!!」

「結婚して下さいああ!!」

「百代先輩最強!!」

刀也の耳には彼らの声はほとんど聞こえていない。

《気》も、体力も、全て奥義に使い切った。

「ははっ……っえ……」

刀也は苦笑すると、そのまま地面に崩れ落ちた。

彼が倒れたその刹那、誰かが倒れる音が響く。

確認しようにもまぶたが重い。

刀也は確かめるための動作は起こせずに、ゆっくりと意識を手放した。

第2話『臆病な剣神』（後書き）

若干、ネタバレあり！

嫌な方は見ないで下さい！

つよきすキャラは、間違いなくレオは出しません。

他には何人が登場予定です。

リクエストがあれば、出したいと思いますのでよろしく願いしま

す!!!

(鉄乙女、橘瀬麗武は登場させます!!)

第3話『幼なじみたちと保健の先生』（前書き）

短いです？

第3話『幼なじみたちと保健の先生』

自らが持つ強大な力。

成長につれて俺は力の意味を求めた。

そして、教えられた。

理不尽な暴力、善人を喰らう悪人……。それらから身を守る術を持たぬ牙無き者たちを護るためだけに、この力は使うことが許されることを。

否、そうでなければならない。

――頬に走る生々しい傷跡。

――真っ赤な血が付着したカッター。

――中学生時代の自分自身と親友、倒れた不良たち、傷を庇いながら笑う彼女。

——痛々しく包帯が巻かれた彼女の苦笑。

そうしなければ、そうしなかったら……『彼女』がまた傷ついてしまう、から。

第3話『幼なじみ』

地面の硬い感触。

（何故、今更昔のことを……）

わずかな夢の世界から帰って来た刀也は、1番思い出たくない記憶の夢を見て苛立ちを覚えた。

(・・・忘れるな、ということか?)

自覚無き力は・・・悲劇を引き起こす。

そのことを身を持って思い知らされた刀也だからこそ、百代の好戦的過ぎる行動を危険視したのだ。

今はいい。

だが、いつかは百代の行動が百代の大切な者たちを直接的・間接的に傷付けるかもしれない。

その時に百代が後悔し、悔やむなら・・・自分が怨まれても止める。

それが——『彼女』を『護れなかった』ことへの贖罪なのだから。

(・・・俺は出来るのか・・・?)

刀也はゆっくりと四肢に力を入れる。

(いや、やらなければ行けない。——己の意識で)

『あの事件』以降、刀也の生きる道を、力の在り方を示してくれたのは祖父——幻十郎——であり、そこに刀也の意志はなかった。

別に幻十郎の教えは、答えは間違っていない。

しかし、刀也はそれでは納得していなかった。

刀也は己にとことん厳しい……否、頑固者である。

故に——求める。

己で導き出す——答えを。

(……くっ……)

ダメージは大きい。だが、立ち上がれないことはない。

(……気絶してろよ。馬鹿が……)

刀也は自分自身に悪態をつけると、式式地獄蝶々を持つと、立ち上がり、ふらふらと歩みを進める。

（とりあえず保健室でも——）

やはりダメージは大きく、足がもつれる。

刀也は前のめりに——

「・・・・・・・・？」

ならなかった。

刀也の肩を長身の少年と眼鏡の少年が支えた。

「おいおい、転入早々にやらかすなよ」

「スバル！？」

刀也の肩を支えた長身の少年こそ、刀也の親友であり幼なじみの伊達スバル（だてすばる）。

「へへっ、このシャーク鮫氷も忘れんなよ」

「フカヒレ!？」

眼鏡の少年、鮫氷新さめすがしんいち一も同じく刀也の幼なじみである。

「まったく、やっぱり刀也は僕たちがいないとダメダメだね!」

「カニ!？」

刀也の手から落ちた、式式地獄蝶々を上手くキャッチした小柄な少女は蟹沢きぬ（かにさわきぬ）。

彼女も刀也の幼なじみである。

「豪勢なお出向かえ……ありがとな」

刀也は幼なじみたちに礼を言う。

「良いつてことよ。——で？ 何処に行くよ？」

スバルが尋ねる。

「保健室に。身体中が痛くてたまらない」

刀也は苦笑した。

「りょくかい」

四人は2年ぶりの再会を喜ぶ間もなく、校舎へと入って行く。

—

「——びじくじくするの。」

「すみません」

保健室に着いた刀也は、保健室の主にして白衣の似合う美女――
佐藤良美教諭に治療を受けつつ叱られていた。

良美は、この春正式に川神学園の教諭に採用された。

美人な上に、柔らかな雰囲気と有能さで男女問わずに生徒たちに入
気がある。

親しみを籠めて『よっぴー』と呼ばれているが、本人はあまり気に入
っていないようだ。

「ふう・・・鉄先輩ならこんなことなかったんだけどなあ。――
――ふふ、顔は先輩に似ているけど違うね・・・やっぱり男の子
だから仕方ないのかな？」

良美は昔を懐かしむように言った。

「鉄先輩？」

年上の良美という鉄の名が、刀也のことを示していないことは明ら

かだ。

『鉄』という苗字は非常に珍しい。

刀也の血族と知り合いなのだろう。

（血族で佐藤先生と同じ20代前半・・・）

考えつく人物は一人しかいなかった。

「もしや、竜鳴館に通っていた乙女さんの知り合いですか？」

「ええ、そうよ」

私立、竜鳴館。

昔は伝統ある女子校であったが、10年前に共学になって名前も一新。

校舎も殆どが木造から鉄筋コンクリートとなり、10年経った現在でも綺麗だ。

生徒たちが大事に使ってきた賜物だろう。

元々女子校だっただけあって、女子の数も権力もかなり高い。

生徒会長も代々女子である。

そして、キリヤコーポレーションの若き女社長——霧夜エリカが竜鳴館に在席し生徒会長をしていた時、乙女は風紀委員長として働いた。

「エリー……霧夜エリカが生徒会長を務めていたころ、わたしは生徒会書記をしていたの」

「……道理で。乙女さんを知っていて当然ですね。大変だったでしょう？ 乙女さんは自分にも、他人にも厳しい人ですから」

「ふふ、そうね。でも、厳しさと同じくらい……いえ、それ以上に優しい人。だから、竜鳴館で嫌ってた人は少ないと思うわ。拳法部部长としても優秀だったしね」

「そうですか。乙女さんは何処に居ても乙女さん何ですね」

刀は思わず苦笑する。

——『根性なしが!』

従姉妹によく言われていた言葉が忘れられない。

刀也と乙女の思い出は、恐怖と厳しき、それ以上に優しさに溢れた記憶だ。

武術や身体能力では乙女を凌駕したが、いろいろと世話になり過ぎて頭が上がり存在だ。

今でも、根本的には刀也は乙女にいろんな意味で敵わない。(あの
人ほどアメとムチの使い方が上手い人はいないよな)

面倒見がよく指導力も高い。

真つすくな性格。

(学校の先生か拳法の師範になりたいって言っていたっけな)

去年、正月に鉄の本家に帰った時……念願の教師になれたと乙女は刀也に嬉しそうに報告した。

刀也も従姉妹の成功を我が事のように喜んだ。

（そういえば、勤め先は竜鳴館だったな）

「刀也、学園長から制服預かったから、動けるなら学園長室に来てくれてよ」

新一が保健室に刀也の制服を持って来た。

「もう行って良いわよ。もう無茶はしないでね？」

良美は刀也の頭に包帯を巻き終わると、新一が持ってきた制服を素早く着替える。

「善処します」

刀也はニヤリ、と笑うと颯爽と保健室を後にした。

「賑やかになりそうね」

良美は机に置いてある写真立てを見る。

そこには、学生時代の彼女と大切な友人たちが満面の笑みで写っていた。

第4話『鉄ファミリー再結成』（前書き）

今回は凄く短いですが・・・作者としては良い感じで出来たと思います？

第4話『鉄ファミリー再結成』

4時間目の開始と同時に刀也は2年F組に到着した。

そして、2年F組の生徒たちは黒板の前に立つ刀也に驚いていた。

今朝、川神学園最強とされる百代と激闘を繰り広げ、彼女の拳を受けたにも関わらず（今までは少なくとも数日間は無意識不明）、頭に包帯を巻いているが午前中に何事もなく目の前に立っているのだから。

「——と、いう訳だ。鉄は2年前までは日本にいたために日本語にまったく問題はない。皆、仲良くな」

梅子が刀也のことを大雑把に説明し終わると、刀也に話を振る。

「はじめまして。ドイツ・リューベックより……と、いうより
神奈川よこすか県横素下市の松笠より来ました、鉄刀也です。よろしく」

第4話『鉄ファミリー再結成』

2年F組の生徒たちは色んな意味で沈黙していた。

刀也の整った容姿は、控えめに見ても川神学園が誇るイケメン四天王『エレガント・クワットロ』の誰よりも優れていた。

筆頭するは溢れ出る^{オーラ}雰囲気だ。

何かを極めた者には独特なオーラを持つというが、まさに刀也がそれだ。

刀也の持つ力——《気》——がオーラとなり、顕れているのだ。

普段なら常人では何も感じさせず、百代や鉄心クラスでなければ刀也の力を見抜けない。しかし、百代との戦いは刀也自身が予想する以上に自らを高ぶらせていた。

そのことに刀也は気が付かず、他を圧していた。

教室の気温が一気に下がったような感覚が駆け巡る。

寒気を覚えるクラスメイトたちを何か変だと刀也が感じた時、ある者のアイコンタクトで異変の原因がわかった。

(・・・サンキュー)

同じくアイコンタクトで返すと、刀也は《気》を抑えた。

そうすると先程まで在った圧力が霧散した。

(初日から問題起こしてばかりだな。大丈夫か？ 俺・・・？)

ハァー、と刀也は小さくため息をついた。

昼休み。

刀也の心配は杞憂に終わる。

「——鉄くん、一緒にご飯食べない!？」

「いやいや、私たちと!！」

F組の女子から食事に誘われたが、丁重に断りを入れた。

何の因果か……F組には刀也の幼なじみ3人組がいたのだ。

先程、刀也にアイコンタクトを送ったのは刀也たちの頼れる兄貴分のスバルである。

そして、3人と食事を取るために売店に向かう。

パンを買って屋上で食べる目算だ。

流石に昼時の売店は人混みでこった返しているが、スバルが構築した裏ルートで難無くパンをゲット。

4人が屋上に行く途中――

「鉄！ 是非とも剣道部に入ってくれ！！」

「いやいや、我ら柔道部に！！」

「『竜鳴館の伝説』の従兄弟なら拳法部に入ってくれ！ とともに全国制覇を目指そう！！」

部活動（武道関係）に強烈なる勧誘を受けたのだが、ある方法で華麗に回避した。

「モグモグ……予想通り刀也はモテモテだね。主にゴツイ系の男子に」

きぬが笑うと、刀也は露骨に嫌そうな顔をした。

「ふざけるなよ力二。こっちはいい迷惑だ」

「それだけなら羨ましくないけどさあ。刀也は女子からも人気があるからいいよなあ」

新一は本当に羨ましそうに言う。

「はは、ボウズは顔がいいからな」

「スバル、それをお前がいうのか？ お前のほうがモテるだろう？」

刀也は褒められるのがむず痒いのか、スバルに軽口を返す。

「それより、ここでは上手くやっていけそうか？」

スバルの問いに刀也は僅かに考え、答えた。

「ああ。ここにきてまだ数時間だが・・・F組はいい奴ばかりだし、生徒たちに熱気がある」

刀が長い修業により身につけたのは類い稀なる戦闘力だけではない。

多くの人間と出会い戦ってきたために、だいたい人の目を見ればその者の本質——善か悪——を見極められるようになった。

「向こう（外国）より、日本だと特にそうだが俺達の同年代は冷静・・・・というより、冷めている人間が多すぎる」

やれ受験、やれ試験だといいいテストの点数、成績表の高評価だけを求める者たち。

それら以外のことはまるで興味を示さない者たち。

刀也は問いたい。

一度きりの青春を勉強だけで終わらせて、生きていて楽しいのか、と？

確かに受験は大事だが、それを成功させるためだけに学校はあるのでは無い。

そんなに勉強だけしたくば、塾だけに通ってると言いたい。

学校は勉強だけではなく、社会で必要な様々なことを知る場だ。

人間関係の形成、集団生活……何よりも友を作る場だと、刀也は考えている。

だからイベント事の学園祭、運動会等より勉強などと考えている学校には全く興味がなかった。

自由な校風で個人を潰さない校風。

様々な行事がある川神学園を刀也は一発で気に入り、日本に帰国後は迷わず川神学園に転入届けを出した。

「暴走は駄目だが、適度な熱さは必要だろう？ ニュートラルは大人になってからで十分だ。熱くなきゃ青春を謳歌できないしな」

無論、これがベストの選択では無いかも知れない。

だが、刀也はこれがいいのだ。

完璧な答えは無い。

なら、自由が信じる答え——信念——を貫けばいい。

「ははは、外国に行ってもボウズは変わらないな。真っ直ぐだ、羨ましいぐらいにな」

普段クールなスバルのこんなにも嬉しそうな笑顔は実に久しぶりだった。

「だから言っただろう？ 刀也なら連絡しなくてもここを選ぶって」

スバルだけじゃなく、新一もきぬも同様に笑顔だった。

「当たり前じゃん！ 僕たちはただの幼なじみじゃないだよ」

誰が名付けたのだろうか？

幼なじみ4人組は自然とこう呼ばれた。

「テツの結束を誇る・・・鉄ファミリーなんだから!!」

此処に――鉄ファミリーが再結成された。

第5話『下宿先』（前書き）

微妙なできです？

第5話『下宿先』

刀也とクリス。

二人の転入生はその容姿と武力が優れていることで目立ち、一日にして校内に名が知れ渡った。

しかし、日本人とドイツ人という違いがあるためにドイツ・リュウベックで同じ学校に通っていたことは2年F組の生徒とごく一部しか知られていない。

第5話『下宿先』

刀也の慌ただしい学校初日はもうすぐ終わる。

帰りのHR。

今朝の怪我が完全に癒え、一子はピンピンしていた。

「クリ！」

「犬！」ピンピンしすぎて、クリスと激突する始末。

「今朝はマグレ！ 今ならあんた何かボコボコよー！」

「・・・！？ いいだろう、決闘だー！」

安っぽい挑発に乗るクリス。

放課後に第二ラウンドを開始しそうな勢いだ。

一触即発。

そんな状況をF組のメンバーは固唾を呑んで見守る。

「二人とも止めろ」

そんな時、刀也が今にも噛み付きそうな二人の間に割って入った。

性格上、こういう場合の刀也は気付いた時には勝手に身体が動いている。

「お前たちが戦うのは勝手だが、場所と時間を考える」

刀也は言葉で二人を止めようとするが、

「鉄くん、退いて!!」

「刀也、退け!!」

止まりそうもない。

疲れたようにハァ、と深いため息をつく。

「仕方ない……実力行使させてもらっぞ」

そう宣言して刀也は動いた。

おもむろに黒板の赤いチョークを掴むと――スナップをきかせて投擲した。

その動きは弓術を修め、優れた動体視力を持つ京でさえ正確に捉えられない。

「「痛っ!?!」」

二人は飛翔したチョークに額を打たれ、揃って尻餅をついた。

「はい、どちらとも負け。席につけ」

刀也は有無を言わせず二人の首を掴むと、いくら女子生徒と言えどもそれなりの体重がある二人を軽々と持ち上げて強引に椅子に座らせた。

「痛いぞ、刀也!」

「黙れ、クリス。あほうの言うことは聞かないからな」

「あほうとは何だ！？ あほうとは！！」

クリスが席を立とうするが、チョークに又もや額を打たれ動きを封じられた。

そうする内に梅子がF組に来た。

「待たせたな、HRをはじめるとしよう」

明日の連絡事項等を梅子が述べる。

それも数分で終わった。

「——連絡は以上だ。あと、クリスの事だが……彼女の面倒は風間達に任せる」

「え、俺達？ いーすけど」

風間ファミリーのリーダーの翔一は即答した。

「?・・・なんで?」

『風間ファミリー』という輪を乱されることに風間ファミリー内の誰よりも嫌う京は、当然の如く梅子の発言に疑問を抱く。

「クリスは島津寮に入るからだ」

川神学園の数ある寮の一つである島津寮。

代々土地を所有し、家が余っている島津家の好意で、その一つが寮として提供された。

因みに島津家のすぐ後ろにある。

実家が遠い等の事情があつて家から学園に行けない者たちが入る寮。

などというが家から学園に十分通える位置に家がある翔一も普通に入っていることから、そこまで厳しく規定していないことが解る。

全部で部屋は8部屋。

男が一階、女が二階を使い、各階一つは共有倉庫として空き部屋にしている。

一見嬉しい状況だが寮は島津家岳人の母、島津麗子が仕切っており男子が勝手に2階に入ると……。『市中引き回しの上、学園校門前に吊される』、という厳しいルールがあり過去に本当に実行された。

それで皆が恐れており学園側も彼女が仕切るなら大丈夫、と男女が共同生活することを了解した。

当然、風呂、トイレは各階別々。

ただし居間は共有で一階居間で食事したりする。

現在……

201【黛由紀江】

202【椎名京】

203【空き部屋】

204【共有倉庫】

101【源忠勝】

102【直江大和】

103【風間翔一】

104【共有倉庫】

島津寮はこうなっている。

「ああ、2階が1部屋空いてるもんな、了解」

「サラッと了解するなあ……」

大和が僅かに呆れたように苦笑する。

岳人は梅子の発言を受けて疑問に思う。

「お袋は2階に誰か入るなんていつてなかったぞ？」

「つい先日に関わったから知らなかったんじゃないか？ それより、今頃は荷物が運び込まれていることだろう」

クリスは岳人の疑問に答えた。

「何と島津寮は・・・温泉も出るとか！」

クリスはこれからを想像して早くもはしゃいでいる。

「楽しみだ！」

「確かに・・・日本を勘違いしている人には好かれそうな場所だよ、島津寮は」

一方、クリスとは対称的に京はドライだった。

「椎名。部屋隣なんだからお前が面倒見ろよ」

「よろしく」

クリスが軽くお辞儀する、が京は意に介さない。

「・・・・・・ではこれで帰りのHRを終わる」

刀也は担当の言葉が聞こえる中、京のクリスに対する対応が気になった。

（・・・・・・椎名京、か）

クリスが特別気にくわないかと思えば、そうではない。

風間ファミリー以外では京はまともに話さない。

会話どころか、挨拶もしない。

風間ファミリーと話す以外は読書をひたすらにしているのだ。

何も誰これ構わず仲良くしろという訳ではない。

あからさまな無視をする京の態度は敵を作り出すだけだ。

だからといって、刀也は『今のところ』京に何も言うつもりはない。

彼女の風間ファミリーとその他に対する極端な態度の裏には、辛い過去があつた事は容易に想像出来たからだ。

(何も起きなければいいけどな)

放課後の2年F組。

「ちょっといいだろうか？」

クリスが翔一を呼び止めた。

「おう。どーした？」

「部屋が隣という椎名殿に寮まで案内してもらおうと思ったのだが・
・・・部活がある、ということで行ってしまった」

「そりゃごめん、あいつ根暗だけいい奴だから。でも俺これから
バイトだからな。——って事で軍師大和」

「分かった。俺が案内する」

「ありがとう」

クリスは柔らかに微笑む。

「それと、刀也も一緒にいいだろうか？ 日本人とは言え、初めて
この街に来たのだから勝手がきかないだろうし」

「刀也？ ・・・鉄のことね。いいよ、一人も二人変わらないし
さ」

クリスは再び大和に礼をいうと、刀也を呼んだ。

「刀也！ 街を案内してくれるそうだ。一緒に行かないか？」

「刀也なら学園長に呼ばれて出ていったぜ」

新一はクリスに答える。

「そうか。なら、仕方ないな……」

クリスは寂しそうに言う。

その悲しげな表情も、大和に礼を言った時の表情も、F組の男子たちがぐっとくる可愛さがあった。

しかし、『クリスにお近づきになる』『父親＋軍隊と戦う』となると、とてもじゃないが無理だと考えてどうすることも出来なかった。

学園長室。

「——と言っわけなんじゃよ。幻十郎との約束なんだな。遠慮はいらんよ、刀也くんは川神院で寝泊まりしなさい」

「ありがとうございます」

刀也は川神院に世話になることが決まっていた。

因みにスバルや新一、きぬは『石田寮』と呼ばれる島津寮と同じ川神学園の寮の一つに入っていた。

「それでは、そろそろ荷物が来るはずなんで失礼します」

「うむ。後でな」

「はい」

刀也は学園長室を後にした。

そして、鉄心はお茶を入れて椅子に腰をかけ、深いため息をついた。

「モモが余計なことをしなければいいがのう」

最近の悩みの種、孫の百代の落ち着きのなさと力を持て余している
実状に頭を抱えていた。

一時期は孫の為に、自らの命を削つても力を封じようとした。

そこへ、刀也が川神学園に転入することを知った。

それを知った後に鉄心は行動を起こした。

幻十郎に事情を話し、刀也には真意を伝えず修業を兼ねて下宿先を
川神院にするように説得した。

鉄心は賭けることにしたのだ。

歳も近く、力も互角だが……力に対して正反対の考えを持つ刀
也に。

「勝手に期待して悪いが……モモを変えてやってくれ」

武神と呼ばれる男も、
なんだかんだで孫思いの一人の祖父であつた。

第6話『いざ川神院へ』（前書き）

訂正版です？

第6話『いざ川神院へ』

スバルは陸上部。

新一はライブハウス。

きぬはバイト。

よって、刀也は一人で帰ることになった。

「……帰国、知らせとけばよかったな」

刀也はガツクリ、と肩を落とした。

学園長室に呼ばれて教室に戻った時にはHRから30分以上経過していた。

よって、教室には誰もいなかった。

刀也は仕方なくトボトボと歩いていると、後ろから元気な声が聞こえてきた。

第6話『いざ川神院へ』

「おい！ 鉄くん！」

「ん？」

結構な距離がある。

しかし、元気の良い潑刺とした気配がここまでしつかりと伝わってきた。

「川神？ どうしたんだ、タイヤなんて引いて？」

「これ？ 夕飯前のトレーニングだよ」

ブルマ
体操服姿の一子は笑顔で答えた。

彼女は修業を始めて10年近くになるが、朝と夕方の走り込みを一日たりとも欠かしたことはない。

「そっか、頑張ってるんだな」

「姉様に追いつかないといけないからね！」

「姉様って言うと、川神百代？」

「うん！」

一子は元気よく頷く。

そして、刀はあることが気になった。

「なるほど。ところで『追いつく』とは武術家としてか？」

「そうだよ。だからトレーニングを欠かさずやってるよ。目指せ師範代よ！」

空気椅子、ハンドグリップ、ダンベル、階段ダッシュ、ところ構わずトレーニングを重ねる一子の姿を刀也は見ている。

努力している。

しかも、人並み以上に。

だからこそ刀也は悲痛な思いになる。

(・・・厳しいな)

一子には武の才能がない。

零ではない。

だが、足りないのだ。

天才の中の天才だけが成れる川神院の師範代になるための武の才が。

刀也は初見でそれに気がついた。

百代には言うに及ばず、百代程ではないが十分に『天才』と言える
クリスや京にも遠く及ばない。

(・・・ 武術を教わるのに川神院程に良い師が揃っているところ
もそうそうない。そこで修業し、クリスに『切り札』を出させてい
ない)

休み時間にクラスメイトたちがクリスと一子の戦いについて話して
いた。

刀也は興味がてらに聞いた。

ただし、戦いの内容は全く尋ねなかった。

ただ一言、こう聞いた。

——クリスは『レイピア』を使ったか？

クラスメイトの返事は肯定だった。

それを聞いた刀也は僅かに驚いていた。

その訳は一子が川神の名を持っているからだ。

無論、川神だから強いなどと思っていない。

同じく武家として有名な鉄に生まれ、武術の才能が無い母を持つ刀也はなおさらだ。

しかし、自ら戦う一子はそれなりに強いと刀也は思ったのだ。

（川神の師範代……険しいぞ）

川神は武の質を落とさないために世襲制を取っていない。

そのために『川神』の名だけでは師範代に成れないのだ。

「頑張れ、俺に協力できることがあれば言ってくれ。出来るだけ協

力はするさ」

「ありがとう！ 何かあったらヨロシクね！」

一子はそう言い残し、タイヤを引き連れてランニングを再開した。

「頑張れよ……川神」

小さな背中に大きな夢を抱いて、今日も一子はひたすらに努力する。
前を向いて。

川神院。

関東三山の一つ。

厄除けの寺院として名高くそれが市の名前になるほど。

『己を高め気力で厄をも祓う』という考え方で武道の鍛錬場所として有名だ。

川神院では多くの修業僧が訓練していた。

そして、今日は少し様子が違っていた。

川神院の道場では多くの修行僧たちが地に横たわっていた。

手練れの修行僧を相手にしているのは彼らより随分若い刀也だ。

刀也は竹刀一本で戦っている。

「「「破ッ！」「」」

手練れの修行僧が四方向から同時に襲い掛かる。

一人一人が達人と呼んで差し支えない者たち。

その者たち相手に刀也は慌てずに対処する。

僅かに早く出た前方の修行僧に高速の突きを見舞う。

空を裂く神速の突きは防御を許さない。

「がはっ!？」

すかさず竹刀をそのまま引き、柄で背後の修行僧を沈める。

「うっ!？」

左右側面から蹴りが来る。

疾い——しかし、刀也には容易に捕らえられる速度だ。

竹刀で右側面からの蹴りの角度を僅かに変えた。

「ぐっ!？」

それが側面からの蹴りを放った二人の同士討ちを誘い、刀也は最小の労力で勝利した。

「そこまで!?!」

川神院師範代の一人、藤堂和樹が試合の終わりを告げた。

「ありがとうございました」

刀也は特に疲れも傷付いた様子もなく一礼する。

対して、修行僧たちはボロボロである。

「「「「おおっ！！」「」「」」」

見物していた修行僧たちは、戦っていた者たちが互いに一礼が終わると一気に声を上げた。

「あの四龍兄弟が簡単にやられたぞ！？」

「流石はあの『鉄』殿だな！」

「ああ！ 強者の100人組手で10分とかからないとは……
噂通りの腕前だな！！」

修行僧たちは皆、刀也の腕前に驚嘆した。

刀也の動きは隙が有るかに見えて実は無い。

修行僧たちのその殆どが刀也の罠（動き）に誘われ、後の先を取られ床に沈められたのだ。

ほとんどが一撃。

床に倒れ伏しているのは80人は下らない。

「いやはや、10年前とは比べものにならない程腕を上げましたね。最早、敵う気がしませんよ。年上の武術家として面目丸つぶれですがね」

和樹は穏やかな顔に僅かに困ったような色を浮かばせていた。

「まさか、師範代にはまだまだ及びませんよ」

和樹はもっぱら武器――刀――を得意としている。

鉄心やルーが肉弾戦を好むが和樹は武器を好んでいた。

だからこそ、和樹は刀也の力量をより鮮明に理解していた。

和樹は思う。

はつきり言って、全盛期の力を持ってしても刀也と5分戦うのが限界だろう。

勝敗はもちろん自分の敗北。

（彼は剣に愛されていますからね）

そうとしか説明がつかない武術に対する圧倒的な飲み込みの早さ。

特に、剣に関することは教えた次の日にはもう修得していた。

鉄家の中でも特に天才と称される乙女でさえ、10年の月日をかけて鉄流剣術の免許皆伝まで辿り着いた。

しかし、刀也は半分以下の4年で免許皆伝者となったのだ。

「それはそうと、今日から刀也くんは川神院で預かると聞いています。改めてよろしくお願いしますね」

「こちらこそお世話になります」

修行僧の一人に、刀也は道場に隣接している川神家に案内されていた。

川神家は一般家庭より僅かに広い程度であるが、古い造りの木造建築はどの箇所も良い木材が使われている。

そして、築100年を超える家は独特な雰囲気放っていた。

「ここです」

刀也は川神家2階に案内された。

2階は入口が襖ふすまではなく、様式のドアであることを除けば床はタタミ、机はちゃぶ台、ござ、刀置き、掛け軸、布団等の和風な部屋だった。

端に置かれた本棚までは以外と距離があり、タタミは16枚で一人には広すぎる部屋だ。

刀也は運ばれていたダンボールから荷物を取り出し、整理していく。

「ちょっといいか？」

と、百代がノックと同時に部屋に入ってきた。

「……ノックの意味は？」

「無い」

百代は堂々といい笑顔で言い切る。

刀也是一つため息をつくど、聞いた。

「で？ 何の用です？」

第7話『とある朝の風景』(前書き)

遅くなりました？

すみません？

第7話『とある朝の風景』

「なんで本気を出さなかったんだ？」

百代は真剣な表情で聞いた。

「本気は出したが？」

刀也ははぐらかしている訳ではない。

今朝の刀也は、自信の全力で戦っていた。

手加減などしていない。

「ならば、何故それを抜かなかったんだ？ 真剣である朱色の刀を」

百代の目は刀置きに置かれた式式地獄蝶々に向けられていた。

「やっぱり気が付いたか……」

そう、式式地獄蝶々は木刀ではなく真剣である。

刀也は式式地獄蝶々を手にとると、百代に渡した。

「コイツは特別製でな。刀身を曝さなければただの木刀だ。センサーにかけても金属反応を示さない。そして、主と認めた者以外は決して抜けない。……。それに、ここは銃刀所持を認めていない国だ。真剣は何かとトラブルを抱える種になる。なら、木刀と偽るのが都合がいいだろう?」

百代は試しに弐式地獄蝶々を抜こうと何度か挑戦するが、《気》を使っても抜くことはできない。

百代は諦め、刀也に弐式地獄蝶々を返す。

「なるほどな。だから、不完全な抜刀術でわたしに敗れたということか?」

百代は皮肉っているが、刀也は全く気にも止めていない。

「俺が未熟だった、だから負けた。それ以上もそれ以下も理由はないさ」

刀也は微笑する。

その笑みは美しさと力強さを兼ね備えていた。

それを正面から見た百代は、自身でも気付かない内に顔を赤くしていた。

第7話『とある朝の風景』

午前4時。

まだ薄暗く、殆どの者が眠る中、刀也は目を覚ました。

就寝は約午後0時。

睡眠時間は平均4時間。

いつも通りだ。

手早く寝間着から柔道着に着替えて、昨日送られてきた鍛練用の木刀『虚空』を手にして部屋を出た。

虚空は重さ、長さともに式式地獄蝶々と同じに作られているオーダーメイドの一品である。

よって、結構な金額がかかっているが、望まずとも何やかんやで危険な事に巻き込まれたことも1度や2度ではなく、その過程でそれなりの金を手にしている。

刀也は浪費癖は無く、かと言ってあまり使うこともないので金はほとんど両親に預けている。

虚空の制作費は高校生に出せる金額出はないが、刀也は普通に一括で支払っていた。

まあ、余談であるが。

「.....」

縁側の外、わりと広いスペースがある庭にたどり着くと刀也は剣術における基本中の基本の構え、剣の切っ先を相手の目に向けて中段に構える——正眼に構えた。

正眼から素振りを開始する。

最初は、ゆっくりと動きを確かめるように。次に、剣と一体化する

かのような『流れ』に則した動き。

回数を10回、20回と増えるにつれて汗の量は回数に釣り合わないほどに増えていく。

刀也はがむしゃらに鍛練を行わない。

一回一回を大切にし、内容をより充実したものにする。

50回で基本剣術鍛練は終了。

次に、斬り上げ斬り下ろしの連続技、抜刀術、突き等の応用剣術鍛練を終えると、虚空を縁側に置いた。

そして、《気》の鍛練を開始する。

「ふうッ」

短く息を吐き、《気》が最も集中しやすい丹田に力を込める。

己に満ちる《気》を高めて集束させ、ゆっくりと解放する。

《気》だけではなく武術にも言えるが、それらは一日して成らず。

長年の積み重ねが、《気》をより高度の域に達せられる唯一の方法だ。

「ホッホッホ、おはよう朝っぱらから感心じゃのう」

「おはようございます、鉄心さん」

鉄心は朝練に励む刀也を嬉しそうに見る。

「昔から基礎鍛練を欠かさんのう。まったく、百代に刀也くんの爪の垢を煎じて飲ませたいわい」

鉄心は「気にしないで続けとくれ」、と伝えて刀也の鍛練を見学する。

時刻は4時50分、川神院の朝の鍛練は5時から始まるのでまだ時間がある。

（それにしても良く練られた《気》じゃ）

鉄心は刀也の纏う《気》を視る。

《気量》は百代に及ばないが、効率の良さは圧倒的に刀也が上だ。

百代の《気量》は生まれ持った割合が大きく、伸びでいえば刀也と百代は比べようも無く刀也が圧倒していた。

けれども、刀也は百代に《気量》は勝ってはいない。

百代の《気量》は、長年修練を重ねた達人と呼ばれる者達よりも生まれた時から遥かに多かった。

だからこそ、武と《気》の奥義とも言える『瞬間回復』を18歳で使えるのだ。

だが、圧倒的とも言える《気量》を誇る百代であるが……今朝、刀也との戦いで《気》を激しく消費して意識を失った。

（百代が気を失ったのを見るのは何年ぶりかのう。——やはり、刀也くんならば……）

鉄心は百代を不憫に思うことがある。常人……いや、天才と呼ばれる者より遥かに短い時間で大抵の技は修得できる天賦の武と《気》の才能。

故に努力を知らず、好敵手と呼べる者もない。

それらが百代に『歪み』を生み出す原因となった。

「おはようー！　じいちゃん！　およっ？」

鉄心が思案にふけていると、元氣よく一子が現れた。

「鉄くん？ 早いね、おはよう！」

「おはよう、川神」

刀也は挨拶を交わす。

すると、一子は「ん」と唸った。

「？ どうしたんだ、川神？」

「それよ、それ」

「それ？」

「呼び方だよ。一緒に暮らしてるんだから、『川神』なんてよそよそしいからやめて。わたしは一子でいいから」

「わかった。ならば俺も刀也と呼んでくれ」

「ワン子の言う通りだな。わたしも百代でいいぞ。その変わりに私も刀也と呼ぶからな」

実に眠そうな顔で、歩いて来た百代が会話に便乗する。

「ああ」

刀也は快く了承した。

「あれ？ お姉様！？ 今日はずいんだね」

一子が驚くのは無理もない。

いつもは、「私は朝に弱いんだ。それに強いから多少遅れても大丈夫」と言って30分遅れで来るのが当たり前だったのだ。

「ほう、モモがこんな朝から起きるとは……今日は槍でも降るのかのう」

「ジジイ、言い過ぎだ」

百代は軽い——常人は軽く骨の一本は持っていかれる威力——右ストリートを放つ。

「止めんか！ 朝っぱらから祖父に殴りかかるな！！」鉄心は迎撃の一撃を放ち、百代の拳をいなした。

祖父と孫娘の拳打は嵐吹き荒れ戦場を作り出す。

二人が放つ技一つ一つが簡単にここいらの物体を破壊しうる威力を持っているが、不思議と周りは傷ついてはいなかった。

それは全て刀也のおかげである。

飛び交う衝撃波や《気》を逃すことなく虚空で斬って、威力を相殺している。

「健康なのはいいが……朝からとばし過ぎじゃないか？」

忙しく動く刀也の疑問は、戦っている鉄心と百代、二人を尊敬の目で見ている一子には聞こえていなかった。

第8話『朝の騒動』（前書き）

細かいところを訂正しました？

第8話『朝の騒動』

午前8時15分。

朝の鍛練が終り、朝食をとった刀也は制服に着替えて百代より一足先に川神院を出た（一子は朝の走り込みに出ている）。

幼なじみたちとの約束を果たすためである。

「刀也、川神院ってどうよ？」

刀也の一撃で強制的に覚醒させられたきぬが、眠そうに目を擦りながら聞いた。

「それは俺も気になるな。刀也の嫁としては美人で有名な川神先輩との同棲は気が気じゃないな」

「……………スバル、割とマジな顔で言っの止めてくれ。俺はお前を斬りたくない」

「ふっ、お前に斬られるなら本望だぜ」

「……………朝からヘビイなネタは、マ・ジ・で・止めようぜ……………」

「

刀也は心底疲れたような表情をする。

近くにいる者たちの視線がイタイ。

一部、熱い視線を送っている女子もいるが。

「そうだぜ！ 時代は二次元！ 皆の恋人ラブマイナス！！」

新一は巷で人気のギャルゲーを熱く語り始めたが、刀也、きぬ、スバルは当然の如く無視。

四人は数年間離れていたとは思えないほど自然と会話し、あたかもずっと一緒に過ごしてきたかのように漂う雰囲気違和感はない。

やがて四人は多摩大橋——別名『変態橋』——へと辿り着いた。

別名の名に変わらず今日も変態（変人）たちがいた。

「兄者！ あれが川神百代じゃけえのお！」

「うむ。噂にたがわず美しい。満点で合格だな」

柔道着を着た、いかにも武道家といった威つい二人組が橋のたもとに踏ん反り返っていた。

こんなことは割と頻繁にあり、この後起こるであろう『イベント』に備えて割と多い人数の川神学園生徒たちは見物の位置にいた。

「川神百代とお見受けするけんのお！」

風間ファミリ―一行の先頭を歩く百代に、挑戦者弟が尋ねる。

「そつだが」

「我らは地元では知らぬ者のいない仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

「川神百代。お前俺達と来い。妻になるけんのお」

百代は実につまらなそうに聞いている。

「ガクトが2人いるみたい。筋肉バカっぽいね」

「ふん。俺様の方が断然知的にナイスガイだろ」

京と岳斗のやり取りには緊張感のカケラもなく、普段通りの気楽さだ。

仁王兄弟をまるで脅威と感じていなかった。

「純粹な勝負か？ 嫁探しか？ どっちだ？」

「勝負なぞしなくても俺達の圧勝だけんのお」

「嫁探した。俺と弟の相手をする嫁のな。ワハハハッ!!」

下卑た二人の笑い。

「何だこの無礼な男達は。挑戦者と言えぬ」礼節を欠く者に人一倍嫌悪感を抱くクリスは露骨に二人を嫌う。

「ここは俺様の見せ場だろう。追い払って——」

「お前の要求はわかった。それに応えるには条件がある」

百代は岳斗の発言を遮り、言う。

「条件？ いいだろう、言ってみろ」

「二人がかりでこの男を倒せたらな」

「えっ？ 僕！？ ムリだよ！！」

百代は風間ファミリーで最弱の卓也を指差した。

「ハッハハハ！ そのようなモヤシのような情弱少年に我らが二人の相手が務まるてでも？」

「違うな。お前たちの相手はアイツだ」

百代の指差した相手は卓也ではなく、その後方10メートル程にい

た鉄ファミリーのリーダー……鉄刀也であった。

「……パス」

「そうつれないことを言うなよ。刀也はわたしの婚約者だろう?」

「はっ?」

刀也が思わず間拔けな声を上げるが、

「「「えええええ!?!」」」

橋に走った声の激震がそれを掻き消した。

そして、男女問わず百代ファンクラブからの殺気が刀也に突き刺さる。

刀也にしたら、彼ら全員が襲い掛かってきても余裕で足らえるのだが……嫉妬と殺気と呪念混ざった視線に思わずたじろいだ。

「自分は聞いてないぞ、刀也!! 説明を要求する!!!」

特に某金髪ドイツ娘や、

「……刀也さん」

某剣術娘とかの殺気が特にキツイ。

なのに、この事態を引き起こした百代は笑って見ていた。

「おいおい、皆さん殺気だってんな。どうするよ？」

「……不本意だが戦うさ。相手さんはやる気満々だしな」

「ハハハ、ボクに朝デッドさせなかった罰だね」

きぬは愉快そうに腹を抱える。

（朝デッドとは……朝にデッドのCDを聞くことである）

「少し黙れ、小蟹。起こしてやったのに何て態度だ。再教育が必要だな」

「やってみろよ、コリア！ 錆び付かせるぞ！！」

きぬが得意のヘッドバットで強襲する。

運動神経の良いきぬの一撃は速い。

だが、速いと言っても刀也には片手で簡単に受け止められる速さである。

「はぁ・・・そんな汚い言葉遣いと無礼を教えたつもりはないんだけどなぁ。お仕置きだ」

刀也は片膝をついて、ぐにーっとほっぺを引っ張る。

「くはー、いはいいはい！」

「反省したか？」

「しだ、しだ！」

「よし」

涙目で暴れるきぬを解放する。

「カニは相変わらず涙腺ゆるいよなぁ。ほっぺ引っ張っただけで涙出るなんてさ」

「な、泣いてない、泣いてないもんね！」

きぬは目元を手で拭くと、刀也に悪態をつく。

「これはやり過ぎだ！ この痛み、記憶したからなっ！ そっちも泣かせてやる！！」

自分で泣いていたことを暴露したきぬに刀也は苦笑を浮かべると、

「学校でな」

きぬを軽く右に押し退けた。

直後、片膝をついた刀也の顔前で拳が止まった。

刀也がきぬを押し退けていなければ、きぬの頭部に命中していただろう。

「貴様……何のつもりだ」

刀也から殺気が放たれる。

空気が凍った。

周りの見物客が、そう勘違いをおこす程の強烈なものだ。

「し、試合中に隙を見せるほうがわるいんじゃない！」

仁王弟は自らの足が震えていることに気が付かず、詭弁のように叫んだ。

「そうか」

刀はポツリ、と言葉を残して動いた。

その言葉に本能が危険信号を発して、仁王弟は後退する。

しかし、『電光石火』の言葉が相応しい右上段蹴りが放たれる。

轟!!

放たれた蹴りは衝撃波を伴う。

誰もが、仁王弟は一撃で倒れたと思った。

だが――

「ヘッヘヘヘ！　たいしたことないのぉ!!」

ビビりまくって仁王弟は吠えていた。

見た目にダメージは無い。

見物客たちは仁王弟のタフさに驚いた。

そして、百代たち実力者は違うことで驚いていた。

「京、クリス、まゆっち、『蹴った』が見えたか？」

「2回・・・いや、3回？」

自信なさげのクリス。

「・・・4回かな？」

僅かに疑う京。

「はい、4回です」

風間ファミリーの新参者であり、最も年下の1年生——黛由紀江は確信を持って言う。

「まゆっちの言うとおりだ。さすがだな」

由紀江は、日本で帯刀を許された『剣聖』 黛大成の娘であり、自身も帯刀を許可されていた。

そして、帯刀するに相応しい實力を持ち、本来なら風間ファミリー 2 番手の實力を持つ武士娘である。

「いえいえ、わたしなんてまだまだです！」 まあ、控え目すぎる性格が時に難だが。

「姉さん、話が見えないけど？ さっき姉さんは『蹴った』ていうから蹴りは当たったんだよね？ さっきの強烈な蹴りをくらってあの人が無傷っておかしくない？」

「そうだな。 まあ大和の考えは半分当たりで半分ハズレだな」

「え？」

大和が疑問を抱いた時、仁王弟が突如として地面に倒れた。

「僅か数センチ横の空を四回蹴ったんだ。 蹴りの一撃一撃は衝撃波を生み、左右から衝撃波が襲い掛かり、結果……あの男は頭を高速で揺らされた」

大和は百代の言葉で事態を理解したようだ。

「……なるほど、脳震盪を起こして倒れたってことだね。だからあの人は無傷」

「どんだけの疾さだよ、あの蹴り。あんなのまともに喰らったら、さすがの俺様の筋肉でも一撃粉碎されそうだぜ」

岳斗が冷汗をかく。

「まあ、モモ先輩と互角に戦ってたからね」

卓也は割と落ち着いていた。

「ハハハ、すげえなあ鉄！」

翔一は純粹に喜んでいた。

仁王兄は刀也の殺氣と纏う《氣》、立ち振る舞いから相当の実力者だと感じていた。

弟は無謀に突っ込み、案の定返り討ちとなった。

（強い……いや、そんな言葉では納まらん。所詮、井の中の蛙であつたか……）

仁王兄にもう戦う意思はなかった。

「あんたはどうする？」

刀也は仁王兄の闘氣が薄れていることはわかっていたが、確認のため聞いた。

「やめておこう。俺では君にかすり傷一つ負わせる自信がない」

仁王兄は弟より高い技量を持ち、また愚かでもなかった。

刀也との技量差が遥かなる隔たりがあることを、確かに理解している。

「最後に名を聞いてもいいだろうか？」

「鉄刀也」

「鉄！？・・・なるほど、敵わぬわけだ」

仁王兄は驚くが直ぐに納得すると、弟を担いだ。

「俺達は、いや俺は慢心し過ぎていたようだ。先程の無礼をお詫びする。すまなかった」

仁王兄は刀也と風間ファミリーの面々に深々と頭を下げた。

そして、刀也に先程までの慢心に満ちた濁った光ではなく、武道家らしい真っ直ぐで清い光を放つ双眸を向けた。

「俺達はこれから再び鍛え直す。心身ともに鍛え直され時・・・また戦ってくれないか、鉄殿」

「喜んで。その時まで俺も更なる精進に励んでいますから」

刀也は笑顔で答えた。

「……ほどほどにしてもらいたいがな」

仁王兄は苦笑すると、一礼して弟と供に去っていった。

第9話『集合』

「……ふう……なんでなんだ？」

刀也は仁王兄弟が見えなくなり、鉄ファミリーと合流すると空を仰いだ。

「日本に帰ってきたら平穏な高校生活を過ごすはずだったのに……」

初日は百代と死闘。

二日目は百代のせいで朝からバトル。

「あれ？ 原因って全部アイツのせいじゃないのか？」

「いや、何だかんだで自分のせいだろう？」

スバルはそう答えた。

「ないっ、それはない。全部百代のせいだ」

「酷い言い草だな」

「……」

刀也は風間ファミリーを連れて現れた百代をギロリ、と睨む。

「お前が言う——……ん……？」

そして、気がついた。

いつもの風間ファミリーに見慣れない者たちがいた。

クリスは最近まで一緒に学校に通っていたのでさほど珍しくない。

問題はもう一人。

長い黒髪、女子にしては長身でスタイルが良い。

何よりも気になるのは手に持った刀。

式式地獄蝶々と同レベル……否、同等かそれ以上の名刀であるのは、剣士である刀也には容易に判断できた。

並の刀とは比べモノにならない存在感を放つ。

もう5年近く経っているがその存在感は忘れることはできない。

相棒は式式地獄蝶々と決めているのだが、もし式式地獄蝶々にで

会わなければ彼女の刀を欲しただろう。

「銘は確か……『朝霧』、だったよな、由紀江？」

「は、はい！ その通りです……！」

気の弱い者なら、問答無用で財布を差し出しているキツイ表情で、睨みつけるようにして答える由紀江。

刀也はそれが緊張の現れであることを理解しているし、そもそも睨みつけられただけで怯むような胆力をしていない。

「由紀江？」

一子は「……誰？」と言う表情を見ると、フォロー上手の軍師はすかさず答えた。

「まゆっちの名前。黛由紀江」

「ああ、なるほど……！ でも、刀也がまゆっちの名前をいきなり呼んだってことは……二人は知り合い？」

風間ファミリーだけでなく鉄ファミリーの面々も刀也にじい、と様々な種類の視線を向けた。

視線を受けた刀也は語り出した。

「俺は中学生最初の夏休みを利用して、ある道場に稽古に行った。その道場の名は『黛』……」

刀也は苦笑する。

「黛剣術道場は『剣聖』や『十一段』の異名を持つ日本最強剣士にして、世界10指に入る剣士『黛大成』が道場主を務めている。大成さんの娘の由紀江とはそのとき知り合った」

「へえ、しかしボウズは本当に運がいいよな」

「ん？ どういうことだ？」

刀也は、スバルの言葉の意味を理解出来ない。

「川神先輩、川神、フリードリッヒ、黛……タイプは違えど滅多にお目にかかれないレベルの美少女にこれほどに縁があるなんてスゲエな、と思ってな。これなら、一度も彼女をつくれなかった刀也にもいよいよ彼女が出来ると思うと……お兄さんも安心できるぜ」

スバルがニヤリと笑う。

「コラア！ スバル、てめえ幼なじみの美少女の一人を忘れてねえか！？」

きぬが顔を真っ赤にしてピョンピョンと跳ねながら、全身で怒りを表現する。

それを聞いた刀也、スバル、新一は、

「カニはないな」

「ない」

「幼なじみ美少女キャラはギャルゲーでは王道だけど・・・カニは色気も頭も足りないからね」

刀也はしみじみと言う。

「ああ。こやつは極上のバカだからな。それ以上でもそれ以下でもない」

「刀也っ！ 今、サラリとボクの悪口言ったなーっ！？」

何気に素早いカニの蹴りをひよっとひよっと、と軽やかに刀也は躲す。

きぬの怒りをなだめるように、スバルが二人の間に割って入った。

「二人ともこのへんにしとけ、遅刻すつぞ」

刀也は時間を確認した。

あと10分で遅刻。

ここからなら歩いてでも10分でつく。

「よし、時間はあるけど走ろう。ギリギリは良くないからな。スバル、カニは任せた」

「おうよ」

刀也は新一、スバルはきぬを肩に担ぐ。

「お前たち遅れるなよ」

刀也たちは風の如く駆けていった。

「・・・鉄たちはアグレッシブだな」

風間ファミリーの軍師は、軽々と人を担いで走り去った二人に苦笑していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6830k/>

真剣で私に恋しなさい！！～鉄の剣士～

2010年12月20日00時29分発行